

第十回  
個人部門 最優秀賞

「暫定三代目」

佐賀県立伊万里高等学校3年

川内 奎人さん

私は、美術大学進学を目指し、毎日夜遅くまで美術室でデッサンの特訓をしている。思うようにならない形と質感。自分の感じたものを感じたままに表すという単純なことがなかなかうまくいかない。三次元のオブジェを写実することのなんと難しいことか。一進一退。それが現状であるが、なんとしてもこの壁を乗り越える必要が私にはある。

私は、有田焼の窯元に生まれた。昭和二十四年、祖父が「天狗谷焼」という窯を開いたのが窯元一家の始まりだ。祖父の磁器は、見た目は重厚だが持つと軽いというのが特徴で、販売当初、有田の新技术として評判になったそうだ。祖父は今、92歳。今も現役で、個展を開くための作品の準備をしている。父も陶芸家の道を選んだが、祖父の窯は継がず「大乘窯」という自分の窯を開いた。父の作品はインターネットで紹介されたり、テレビのグルメ番組に登場したりするが、他の「有田」とは根本的に異なっている。父はろくろを使わない。石膏の型抜きによつて基盤となる形を作り、その上でアナログな歪みの美を追求している。釉薬にも普通使わない原料を使用する。父の自評によれば「円や球体基調の磁器の文化から逸脱した陶芸家」ということになる。いわば、異端なのである。

私は、作品創造に熱中する二人の姿を幼い頃から見て育ち、ぜひ後を継いで、自分も有田の伝統を発展させたいと考えるようになった。美術大学合格を目指し、デッサンと格闘するのもこの志が大本にある。

しかし、ここにひとつ、自分の技術とは別に大きな不安がある。それは、1990年代のバブル経済崩壊から始まった焼き物業界の不況である。店をたたむ商店や問屋が後を絶たず、今の有田にはかつての活気はない。私が陶芸家として独り立ちした時、有田の焼き物産業人口は激減しているのではないか。残念ながら、現状を考えると、それはきわめて可能性の高い、悲しい未来予想である。確かに、ゴールデンウィークの陶器市や、秋の窯元祭には世界から多くの焼き物ファンが有田を訪れる。その点では、有田は焼き物では世界一のブランドと言ってよいし、伝統産業としては今後も維持できるだろう。しかし、このままでは、有田は生産力と創造活力を失った名ばかりの刺激の乏しい町になることは避けられない。

私は「世界の有田」ではなく「有田を世界に」という気概を町全体が持ち、行動する必要があると考える。たとえば、ニューヨーク、ローマなどの世界の主要都市で陶器市を開催するのはどうだろうか。また、有田の陶芸家が協議して、その年ごとのモードを決定する。そしてそのテーマに即した「新作陶器ショー」を開き、世界のメディアに発信する。パリやミラノのようにである。もちろん、それらを可能にするためには、世界の才能の集結が必要だ。自由に使える窯を多数設置し、陶芸家用の集合住宅を準備するなど、若手の陶芸家に有田で創作してもらおう環境作りも加えて行わなければならない。

私はまだ暫定の三代目である。陶芸家として独り立ちできるかどうか未定だ。したがって私の構想は今のところ、妄想に近い夢でしかない。しかし、私は、いつの日か必ず陶芸家となり、この夢を絶対に実現したいと思っている。伝統を

支え持続させるのは、革新性と改革の意思であり、それが、祖父と父と有田から受け継いだ私のDNAだ。

独創の大家ピカソのデッサン力は世界一といわれる。世界に飛躍するためには確固とした基本が不可欠だ。デッサンと格闘する現在の私は、将来の私と有田の未来につながっている。私は今、自分の人生の質量を感じている。祖父や父のように、有田を背負い、そして発展させる独創性とリーダーシップを持った陶芸家になるため、精一杯がんばりたい。

個人部門 優秀賞

## 「アジアという一つの地域をみつめて」

東京都早稲田大学高等学院3年

中川紘一さん

「アジアという一つの地域意識を広めたい」これが私の大志である。

今、いくつもの言葉が話され、民族も多様なヨーロッパに「EU」という連合が存在している。設立の過程や思惑はさておき、設立の結果、今のヨーロッパ人は国民という意識に対して、自分たちをヨーロッパの地域、EUの住人であると考え、いわばEU民ともいうべき意識・感情が新しく生まれているようだ。この傾向は設立後に生まれた世代ほど強い。このことは地域の発展・平和にとってこれ以上ないほど効果的な意識改革であると思う。

例えば日本にしても、どの都道府県に住んでいようが帰属意識としては、一番上に日本人として他国に負けたくないという「日本国民」がある。次に他県には負けまいとする「都道府県民意識」的なものもある。私の目指すものは簡単に言えば、この拡大アジア版である。アジアの各国が互いに競争しつつも、帰属意識の一番上には「アジアという地域」があるべき、ということだ。

もちろん国益や歴史的背景による感情、宗教・民族など、もともとまとめられないものも多くある。だが、アジアという地理的位置は考え方や価値観、言語が違えども変わることはない。ならばまずは、自国の利益やおのの愛国心をひとまず脇において、自分の住む地域に共通点や愛着を見出し、文化や政治を超えてアジア人として共に一歩を踏み出すのが平和で豊かな未来に向かう最良の道であると思う。

なにも常に隣国を愛し助けるべきだ

という倫理を追っているわけではない。むしろ好きなかだけ競い合いお互いに切磋琢磨するべきである。その上で自国がさらに発展するには地盤となるアジア全体が発展することが重要だということとを述べたいのである。

今年の四月二十二日に外務省の21世紀東アジア青少年大交流計画の一環として、早稲田大学で日中シンポジウムがあり、パネラーを務めた。その時に「各国が国レベルで仲良くする必要はないが、国民がアジアという地域に愛着を持ち、またアジア人としての自負を持つことが、これからのアジアの発展と平和には必要だと思う」と発言したところ、中国の学生から同様の意見が出て多くの賛同を得た。そこで出た意見の一つに、人々の帰属意識がアジアに向けば、おのずとアジア人としての「identity」を持つようになり国を越えて助けあうだろう、というものがあつた。まったくもってその通りだと思う。

マレーシア前首相のマハティールさんも同様の意見を述べていた。それは、昨年の夏に参加した日本経団連の御手洗会長が塾長をなさっている「日本の次世代リーダー塾」という二週間の講義の中でのことである。「近隣諸国を豊かにすることが大事である。他国が豊かになれば自国も豊かになり、域内全体が富めばけんかをする必要も戦争をすることもテロ行為を恐れることもない」とおっしゃったのだ。

昨年末 ASEAN が ASEAN 憲章に署名し、2015年の共同体実現に向けて新たな一歩を踏み出した。この共同体の中心になるのは現 ASEAN 加盟国の十カ国プラス日中韓の合計十三カ国と見られているが、実現したとき、どれくらいこの地域愛を持つアジア人が生まれているのだ

ろう。

この2015年には私は25歳になっている。何人のアジア人と意思の疎通ができているかはわからない。もしかしたら、共同体すらできていないかもしれない。でも、その時の私が日本・アジアのために働いているように、少しでも多くの人がアジア人になれるように、国際交流への参加や意見の交換などを続けていきたい。そして、いつかは政治家になってこの考えを実現したい。今は、その夢に向かってもっともっと勉強をしたいと思う。

個人部門 審査委員特別賞

「生きる意味／俳句に懸ける青春」

福岡県立八女高等学校 1年

近藤 史紀さん

あれは今から一年ほど前。新緑の美しい頃だった。国語の授業は嫌いでもなかったが、それほど好きという訳でもなかった。ただ、その日も移り行く窓の外の風景を眺めていたのである。教科書のページを開くと「俳句の世界」とあった。「俳句」の文字を見ると

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

芭蕉

といった松尾芭蕉の句のように有名な、いかにも教科書に載っていそうな句を思い浮かべ、身近なものには感じられなかった。しかし、そのうち、教科書を音読する中で、ある一句と出会った。

万緑の中や吾子の歯生え初むる

これは中村草田男の句で、季語の万緑と

は、どちらを向いても青々とした緑に満ちあふれていることを指し、その中で我が子に歯が生え初めた感動を親の目線から詠んだ句である。この句を初めて読んだ時、教室の窓から見える山々や木々の新鮮な緑に、恐ろしいくらいのエネルギーを感じたのであった。

ところで、俳句の中に作者の感情は一切ない。十七音の短い世界に、作者が感動した事柄の一瞬を切り取っているのである。そして、その感動を作者が語るのではなく、まるで読者がその場面に立ち会っているかのように感動を伝えることによって十七音に一つの世界が生まれると考える。また、それは偶然の感動ではなく、作者の意思によって、必然的に仕組まれた感動なのだと思う。それが、俳句の感動の伝え方だと考える。

この俳句の世界を愛し、いつの間にか自分自身でも俳句を詠んでみたいと思うようになった。中学三年生の夏から、一日一句の目標で毎日詠んでいる。自分にとっては、日記のようなもので、何気ない日常を詠んでいるため、人に感動を与えることはないが、後から読み返すと、その時々的心情が面白い。それにしてもなぜ中学三年生という高校受験もある時期から俳句を、それも毎日詠むなどといった目標を立てたのか自分でも不思議に思う。しかし、逆にそのような状況であったからこそ、俳句が必要だったのだ。「高校受験は大きな人生のわかれ道。君たちは人生の岐路に立たされている」などと言われ、不安で辛く苦しい日々だった。そんな時に心の支えとなったのが俳句であり中村草田男の句であった。万緑の句は、喜びの句であるが、自分には生命のすばらしさや、自然の力強さ、生きることそのものだった。そして、死んでしまいたいと思うほどに追い詰めら

れた時には、その句を思い出して命の尊  
さを考えた。毎日、日記の代わりに付け  
ている俳句も慰めとなった。その日一日  
で一番うれしかったことや喜んだこと、  
新たな発見、悲しかったことや辛かった  
こと、悔しかったことなどを俳句にする  
のである。そうすると、どんなに小さな  
幸せも飛び切りすばらしいものを感じ  
られ、どんなに悩み苦しいことでも、ち  
っぽけに思えるようになった。

こんなにもすばらしい俳句の世界を  
多くの人に理解して欲しい。殺人や自殺  
という言葉を毎日耳にする現代社会に  
おいて、人々の生きる支えとなってくれ  
るのではないかと考える。人の心が空虚  
になって、働くだけの機械とならないた  
めに、自殺したいと考えた人が死なない  
で済むために。自分だけの取っておきの  
一句と出会って、それが心の支えとなっ  
てくれればと願う。そうして、俳句の輪  
が日本だけでなく、世界を結んでくれる  
ことを祈っている。

秒刻みの現代、世界でいちばん短い定  
型詩は、人々の心のオアシスになるだろ  
う。この心のオアシスを広げる活動をし  
たいと考える。自分に「生きる」という  
意味を考えさせてくれる俳句に感謝し  
ながら。

グループ部門 最優秀賞

### 「多感な時期の

あなたたちは本を読むべきです」

山口県立厚狭高等学校2年

池田舞さん 勝原加奈子さん

上田なつのさん

夏休みの宿題の代表が「読書感想文」である。私たちも、小学校から高校二年の現在まで、十一年間課されて続けた。幸い、私たち三人とも読書が好きであり、部活動でも新聞部に所属しているため、読むことにも書くことにもそれほど抵抗はなく、この宿題もあまり苦痛には感じない。しかし、周囲を見回すと、読書感想文は、生徒にはあまり評判のよい宿題ではない。また「読書感想文」が読書嫌いを作っているという批判もあるようだ。それでも、懲りずにこの宿題が課され続けているのはなぜか。私たちは新聞部という文字や活字に深い関わりを持つて活動している者として「読書感想文」の意義、そして「読書」の意義について考察してみようと思う。

私たちはまず、現代の高校生の読書の実態について調べてみた。全国学校図書館協議会の調査によると「五月中に一冊も本を読まなかった（不読者）」の割合は、高校生は1997年に69・8%とピークであったが、10年後の2007年には47・3%に低下している。また2007年の調査結果では、小学生は4・5%、中学生は14・6%と低い割合である。また「五月に読んだ本の冊数」は、高校生は三十年前の1977年には1・4冊であったものが、2007年には1・6冊になっている。小学生は4・7冊から9・4冊、中学生は2・5冊から3・4冊といずれの学校でも、三十年前と比較して増えてはいる。しかし、不読者の調査においても、小中高と学年が

進むにつれて読書量が減少している。しかも、高校生の約半数の生徒が1か月に一冊の本も読まず、高校生の1か月の平均読書量が2冊に満たないという実態には、読書の危機を感じる。

ここで、読書の意義について考えてみたい。人間は経験によって成長していく存在であるが、私たちが直接経験できることは限られている。それを補ってくれるのが本であり新聞であると考える。本を読むことにより、未知の世界や人々に会うことができる。新聞を読むことにより、リアルタイムで、日本中、世界の人々についてやそこでの出来事を知ることができる。本や新聞は、時間の壁も空間の壁も越えて、私たちに多くの経験をさせてくれる。その経験を通して、他人の気持ちも理解できるようになる。大人の入り口にいる私たち高校生こそ、本や新聞を読み、さまざまな経験を重ね、成長していかなければならない。そう考えたとき、高校生の読書離れの実態は深刻な問題である。

つまり、読書は成長段階の生徒には、欠くべからざるものという考え方から生まれたのが読書感想文なのではないだろうか。また、読書感想文の背景には、夏休み後に実施される読書感想文コンクールがある。多くの学校はコンクールへの応募も目的の一つとして児童生徒に読書感想文を書かせているのである。

現在、さまざまな読書感想文コンクールが実施されているが、そのスタートは1955年に全国学校図書館協議会が実施した「青少年読書感想文コンクール」である。学校図書館法施行2年目に、青少年の良書に対する関心を高め、先生方の読書指導の一助になることを目的として実施された。このコンクールに小中

高合わせて、五二、九四三編の感想文が応募された。つまり、読書感想文の宿題のスタートもここにあると考えられる。そして、このコンクールは、2005年には第五十回を迎え、その応募校は、全国の小学校の81・6%、中学校の74・3%、高等学校の46・9%に及ぶという。第1回には一六、五八三校であったものは2005年には二九、八五五校と五十年間で増加し続けた。これだけの応募校があり、しかもこれが衰退せずに増え続けたということに読書感想文が意義を持ち続けたということ証明していると考える。

しかし、読書感想文を“書かされている”と感じている児童生徒は多いだろう。けれども、読書感想文も取り組み方によっては、自主的な活動とすることができないのではないだろうか。私たちは、心動かされる出来事を経験すると、誰かに話したい、伝えたいと思うものである。私たち高校生の日常会話でも「テストが難しかった」「昨日の高校野球は感動的だった」等々、喜怒哀楽（感動）の経験については特に話題になる。読書についても同じことが言える。本を読んで感動すれば誰かに伝えたいくなる。その伝える方法の一つとして、読書感想文があるのではないだろうか。また、読書によって得た感動を、文字によって書いてみることににより、その本をさらに深く読み込むことにつながり、自分の考えを深めることになる。つまり、読書感想文を書くことによつて、ただ読むだけの読書から一歩進んだ読書ができるのである。そうだとすれば読書感想文は、たとえ、強制されてでも、年一回くらいは、小中高という多感な時期に取り組みべきものなのではないだろうか。

ここで、私たちの所属する厚狭高校生

の読書の現状を調査した。まずは、読書量の目安として、学校図書館の利用状況を見てみた。厚狭高校には、2003年に司書教諭の先生が配置され、積極的に読書活動が行われるようになった。その結果、図書館の利用率は飛躍的に伸び、2002年の一人当たりの貸出冊数20・3冊であったものが、2003年には4・4冊に急増した。そして、その後も増加し、昨年は約6冊の貸出数となっている。また、厚狭高校の全生徒は、年間10冊以上の「読書ノート」の記述を目標としている。年間5回、提出の義務があるのだが、約八割の生徒が目標を達成できているようだ。しかし、読書ノートを提出しない生徒や3年間、1冊も図書館から本を借りない生徒もいる。厚狭高校でも、自主的に読書をする生徒と、本を読まない生徒との差は大きく、すべての生徒が意欲的に読書を行っているわけではないようだ。

このような高校生の読書の危機的状況は、読書や新聞の意義を確信して活動している新聞部のメンバーである私たちとしては看過できない。そこで、私たち新聞部は、厚狭高校生に読書へ興味を持ってもらうための活動を開始した。厚狭高校生は読書活動をひと通り行っているが、義務的に取り組んでいる生徒も多い。そこで「読書のすばらしさや楽しさを知らせ、読書への興味を呼び起こすこと」を目標にした。読書のすばらしさを一番知っているのは作家ではないだろうか。生徒に人気のある作家を取材し、厚狭高校生への言葉をもらえば、効果も大きいはずだと考えた。

そこで、学校図書館の貸出統計の中から人気作家を抽出すると、「重松 清」「あさのあつこ」「有川浩」「森 絵都」「石田衣良」が挙げられた。その中であさ

のあっこさんが八月に山口県に講演に  
来られるという情報を得た。早速、講演  
参加を申し込み、準備を開始した。まず、  
あさのあっこさんに厚狭高校生からの  
メッセージを届けることを企画した。講  
演の主催者に連絡したところ、あさのさ  
んは、高校生や中学生の生の声を聴きた  
いと言われており、高校生からのメッセ  
ージは喜んでもらえるだろうというこ  
とだった。早速、学校図書館に色紙を用  
意し、全校生徒に呼びかけて、あさのあ  
っこさんへのメッセージを書いてもら  
った。二枚の色紙に厚狭高校生からの寄  
せ書きが集まった。この段階で、すでに、  
読書への興味を呼び起こそうとする私  
たちの計画は前進した。その色紙を新聞  
部で折り紙などで飾り付け、厚狭高校生  
の思いが伝わるように願いを込めてラ  
ッピングした。

講演当日は、あさのさんから中学生と  
直接話したいという希望があり、中高生  
からの質問を受ける時間が設けられた。  
また、主催者の配慮により私たち厚狭高  
生からの寄せ書きを渡す時間も、取って  
いただくことができた。あさのさんほと  
も温かい人柄で、寄せ書きもたいへん  
喜んでくださった。最後に、あさのさん  
は私たち中高生に向けて次のように語  
られた。「今、多感な時期のあなたたち  
は本を読むべきです。また、物語を自分  
で書いて人に見せるのもとてもよいこ  
とです。本を読んだり、物語を書いたり  
すると、自分自身が見えてきます」。こ  
の言葉に、今回のこの論文のテーマにつ  
いてのすべての答えがあるように感じ  
た。厚狭高校生に向けては「物語の快感  
を」と色紙に書いていただいた。現在、  
この色紙は、厚狭高校の学校図書館の入  
り口に、あさのさんの著書とともに展示  
してあり、読書の楽しさ、すばらしさを

伝える役割を十分に果たしてくれてい  
る。展示を開始した夏休み明けには、多  
くの生徒が訪れ「厚狭高校生へのメッセ  
ージだ。新聞部すごいぞ」と驚嘆の声も  
上がった。あさのさんへの取材の目的は  
達成できたと言えよう。そして、あさの  
さんとの交流は、私たち新聞部員の心  
にも大きな感動を残した。新聞部として、  
文字、活字にこだわりつづけ、本や新聞  
を読むことの意義を伝え続けることに  
新たな勇気をいただいた。

今年「源氏物語千年紀」である。千  
年もの時を隔てて、この物語は読み継が  
れている。菅原孝標女は「源氏物語をす  
べて読むことができる幸せに比べれば  
後の位も何の価値もない」と更級日記に  
綴っている。読書の魅力は千年の間、色  
褪せることはなかった。現在の日本に住  
む私たちは、千年前はほんの一部の貴族  
にしか接することのできなかつた本や  
文字に、誰でも接することができる。意  
欲さえあればいいのである。世界には、  
貧困や紛争などのために本や文字に触  
れられない子どもも多い。私たち日本の  
高校生は、文字のある幸せ、本が読める  
幸せを実感し、その意義を再認識すべ  
きである。私たち高校生には、次の時代を  
担う責務がある。さまざまな実際の経験  
と本や新聞などから得る間接的な経験  
によって豊かな人間に成長していかね  
ばならない。

グループ部門 優秀賞

## 「島医療の未来」

鹿児島県立南種子高等学校2年

小脇菜奈さん 島崎結夏さん

柳田麻衣さん

「外来診療は午前のみとします」平成二十年六月、私たちが住む町にある唯一の総合病院（公立種子島病院）が、大きくその診療体制を変えることとなり、町に動揺が走った。

外来患者約200人、入院患者約50人を抱え、離島の医療の充実を一手に引き受けているような病院である。診療時間短縮の理由は、鹿児島大学病院から派遣されていた医師の任期がこの6月に切れ、その後任が確保できなかったことらしい。これまでの常勤医師は、外科医3名、内科医1名だったが、このうち2人の任期が切れてしまうという。確かに、外来診療、入院患者の診察・検査、在宅診療、急患対応、当直などの業務を考えれば、事態は深刻で、とても現状の維持は望めないことはわかる。しかし、全国的に医師不足が叫ばれる今、特に医療過疎地とも言える私たちの住む離島では、打開策はないものだろうか？

とにかく、医師に来てもらわなければならぬ。四年前に導入された「新医師臨床研修制度」により、全国的な不均衡が起きたことは知られており、制度を見直すべきだという声はすでにあがっている。しかし、医師不足に悩む地方や離島でも、医療従事者を招致するような「魅力ある地域づくり」をすべきではないかと私たちは考える。私たちの住む南種子島町では、肺がんによるがんの死亡率の高さが全国でトップクラスであるというデータが出ている。若年期における喫煙率も全国平均値より高い。田舎町で、これといった楽しみが他にないから

だろうか。実に残念な統計結果である。

そこで、この結果を逆手に取って「がん研究所の招致」をするというのはどうだろうか？ 町や島（一市二町）が一体となり、国や県の協力を得て招致を行う。将来的には「隣接のホスピス設立」も視野に入れる。当然、医学関係者が種子島に居住することになる。がん研究の拠点として「がん研究に関する学会」を島で行うこともあるだろう。そうすれば、医学関係者や医療従事者が多数島を訪れることになる。都合のよいことに、種子島は、年間を通してサーファーたちが全国から訪れ、ロケット発射センターもある観光地である。交通機関も宿泊先もすでに整っているのだ。離島医療に興味を持つてもらおう機会にもなる。自然豊かでのんびりとした素晴らしい生活環境の種子島を訪れた医師たちに知ってもらい、さらに医師同士のネットワークによって他の医師にもこの島のよさが伝わっていけば、人的資源の確保が期待できる。町民のがんへの関心が高まり、予防効果も期待できるだろう。住民にも医療界にも利があり、一石二鳥である。

次に提案したいのが「ドクターヘリの導入」である。現在でも、島で治療困難な状態にある患者の場合には「救急ヘリ」によって本土の病院へ搬送している。これまでも、多くの町民がこのシステムによって命を救われた。しかし、ヘリの中で患者の容態が急変する可能性があるにもかかわらず、搬送している間は治療を行うことはできないのである。これをドクターヘリによって回避するのである。必要な機材を載せたヘリで、医師に島に来てもらい、種子島で治療を行う。本土での治療は、患者本人にも付き添いの家族にも負担が大きい。もし、地元での治療が可能になれば、心強い診療ル

ートとなる。その後の診療はインターネットを利用することを考える。公立種子島病院には、今、その数の不足が問題化している常勤の医師以外に、月に数回、脳外科・眼科・耳鼻科の先生が鹿児島大学病院から診察に來られる。しかし、その先生たちがおられない間に緊急治療が必要となった場合、専門外の医師による治療には限界があると思われる。もちろん一人ずつでもいいから専門の医師が常駐してくれることが理想であるが、それが困難であれば、ここでも「インターネット診療」が問題を解決してくれるはずだ。

このように「ドクターヘリの導入」は「空間的距離」「時間的距離」の隔たりをなくしてくれると考える。ただし、注意しなくてはならないことは、患者側の意識である。今、社会的現象として「病院のコンビニ化」「救急車の過剰要請」が問題化しているが、必要性が低いのに安易にドクターヘリを要請するというような事態にならないよう、法の整備も必要になってくると思う。

種子島では、平成十九年に一時「島唯一の産婦人科病院の閉院」の危機も訪れた。長年この島で頼りにされてきた産婦人科病院であったのだが、救急体制等が整備できないことが原因であった。ところが、鹿児島のとある産婦人科医が救世主となって、平成二十年一月一日「種子島産婦人科医院」として再スタートすることになった。産科医不足は全国的にも特に顕著な傾向であるにしても、安心して子どもを産むことができない国に未來はないと思う。そしてまた、そこで生まれた大切な命を守ることも重要である。

現在、産婦人科医を希望している若い男性医師は激減し、二十代の産科医の4

分の3は女性が占めている。しかし、女性の場合、自分自身の出産や育児と医師という過酷な労働の両立は非常に難しく、仕事を一時中断するケースも多く見られる。これらが産科医不足に拍車をかけているのも事実であるらしく、日本産婦人科学会では「女性医師の継続的就労支援」という援助体制を準備中ということである。私たちメンバー三人も、将来医療関係の職業に就きたいと考えているが、やはり、そのやりがいのある仕事を継続できるような職場環境が整ってほしいと切に願っている。

私たちの故郷、種子島が、全国または世界のモデル地域になるような日を私たちは夢見ている。がん検診の受診率が高くなり、高齢者が安心して毎日の生活を営めるような地域。医療従事者がいきいきと働ける地域。若い世代が地元の豊かな自然の中で、安心して出産そして育児をすることができる地域。私たちの夢がかなって医療に従事する仕事に携わる日が来たら、ぜひそんな故郷で胸を張って働きたい。

グループ部門 審査委員特別賞

### 「支援四年目の挑戦」

山口県立厚狭高等学校2年

田中美帆さん

河島留美さん

はじめに

厚狭高校新聞部が、フィリピンの貧困地域ペレーズ島の子どもたちへの支援活動を開始して4年目を迎えた。今年の3月、活動を開始し3年間継続してきた先輩たちが卒業した。そして、この支援活動を私たちが引き継ぐことになった。ところが、中心になって活動をスタートしてみると、私たちの前には、さまざまな問題が横たわっていた。その問題とは継続してきたがために生じたものである。私たちは、これらの問題に向き合い、解決策を考えることから出発した。そして先輩たちの支援活動を継続しつつも、改善すべき点は改善し、私たちの新たな視点を加えた活動を開始した。ここに、私たちが直面した問題点をあげてみる。

#### 問題点1 新聞部はボランティア部か？

私たちの支援活動に対して「新聞部なのになぜボランティア活動をするの？」という疑問をたびたび投げかけられる。絵本の英訳、紙芝居の作成、募金、衣類や文房具提供の募集、それらの集計や送付など、新聞部はフィリピンの支援活動にかなりの時間を割いている。私たちの行っていることは、確かにボランティアである。しかし、ボランティアは、身近なところから始めることが大切である。誰がどこから始めてもかまわないと考えている。偶然フィリピンの子どもたちの窮状を知り、なんとか手助けしたいという気持ちを持った者がいた。それが私たち新聞部の仲間だったのである。

しかし、私たちは新聞部でなければで

きない支援活動をしているという自負はある。学校新聞や文化祭でのフィリピンの貧困地域の紹介など、新聞部として「多くの人に情報を伝え、知ってもらおう。そのことにより、現在の社会的課題である国際理解を進め、国際協力や国際支援の輪を広げる」ことを活動の目的としている。それは、実際に私たち自身が支援に取り組み、その活動を通して、フィリピンの人たちや他のボランティアの人たちと密なコミュニケーションを図り、数多くの正確な情報を得て伝えるからこそ、説得力のある情報になっていると考える。そして、私たちの活動を知ったことがきっかけとなって、世界の貧困や飢餓、戦争や難民について、また、子どもたちの窮状について考えてくれる人たちが増やすことも新聞部の役割である。その活動を通して、世界中が抱えているさまざまな問題の解決に少しでも貢献したいと考えている。

#### 問題点2 文房具集めで小さな鉛筆や使い古され汚れたたもの：

ペレーズ島の子どもたちは、日本の子どもなら当然のように持っているはずの文房具さえも不自由している。そこで、3年前から活動の一つとして、全校生徒に呼びかけて文房具集めを開始した。

「家庭に眠っている文房具を寄付してください」というチラシやポスターを作り、文房具の寄付を呼びかけた。鉛筆、クレヨン、ノート、下敷き等数多くの善意の文房具が集まった。しかし、中には、使い古されてこれ以上使えないような小さな鉛筆や汚れて使用不能な文房具も見られた。それを見て、私たちは改めて支援の原点を考えたいと思った。私たちがフィリピンの子どもたちへの支援を始めたのは、「隣の友だちが困ってい

れば、手を差しのべるのは人として当たり前の行為である」という考えからである。そうであるとすれば、たとえ、貧困地域への寄付であっても、心を込めて大切な友だちに贈るといふ気持ちがないければならない。そして常に、受け取る立場の側の人の気持ちを考えることは人間としての支援の基本である。私たちは、活動を広げ、協力を求める中で、その点を理解してもらおう活動が必要だと痛感した。ペレーズ島の子どもたちからは、送られた文房具を嬉しそうに抱えている笑顔の写真が届いた。貧困の中で懸命にがんばっている子どもたちの笑顔には、私たちの方が励まされる。一方的に与えることが支援ではないのだ。お互いに与え、与えられる平等な関係としての支援が、私たちがなすべき支援活動だと思う。フィリピンの子どもたちの笑顔に恥じない支援をしなければならぬと強く思う。

### 問題点3 毎年募金や物資の寄付が減少していく

支援を始めて四年が経った。毎年、文化祭で募金活動を行い、2年目からは文房具や絵本の募集も行ってきたが、毎年集まる金額や物資の量が少しずつ減っている。今年、募金活動で集まった金額が少額であったため、同級生からは「こんなお金で役に立つの?」と言われた。私たちの募金は、ペレーズ島の子どもたちの教育施設で、給食費、教科書代金、先生たちの給料などの一部として使われている。金額の問題ではなく、募金を通して世界のさまざまな地域の窮状を知って、理解してもらい、そして国際協力の第一歩としてもらうことが大切だ。しかし、実際に金額や文房具が集まらなくなっていくということは、私たちにと

って大きな問題である。そこでもう一度、支援の形を見直したいと考えた。

子どもへの支援活動の代表として、ユニセフの活動が挙げられる。ユニセフは子どもの権利を保護する主要な団体であり、150以上の国と地域で子どもたちの生存と健やかな発達を守るため、保健、栄養、水と衛生、教育などの支援事業をその国の政府やNGO、コミュニティと協力しながら実施している。子どものことを最優先にして「すべての子どもに教育を」という姿勢は、私たちがペレーズ島に支援している考え方と同じである。そして、ユニセフでは現在、世界で学校に通えないでいる一億一、五〇〇万人の子どもたちが学校に通い、また修了できるよう、文房具、黒板など、学校に必要なものを届けるとともに、学校に井戸やトイレを設置したり、また先生のトレーニングを行ったりしているという点にも私たちの活動と共通している点がある。

そこで、私たちは、問題解決のために、ユニセフが課題としていることを参考にしたいと考えた。ユニセフの事業計画では、コミュニケーション・啓発活動の重要性を挙げ、メディアなどを利用して効果的なコミュニケーション活動を行っていくことが必要だと訴えている。具体的にユニセフの活動を見ると、各種刊行物の制作と発行の継続、ホームページの一層の充実、日本ユニセフ協会大使として歌手でありエッセイストのアグネス・チャンさんや医師の日野原重明さんの協力による広報活動をしている。私たち新聞部も校内活動、ポスター等の手段で積極的な情報の伝達や広報活動をしているつもりであったが、さらに、効果的な広報活動を展開する必要性を感じた。

また、ユニセフでは募金活動について、長期的に安定した募金を得るために、既存の募金との関係強化と新規募金者獲得のための各種チャンネルの開発をあげている。新聞部も今までの校内対象の活動を継続するとともに、新たな協力者を獲得していく道を考えていかなければならない。

### 問題解決に向けての新たな出発

「対等な関係の支援」「広報活動」「新たな協力者の獲得」が私たちに与えられた課題となった。私たちは、先輩から引き継いだ活動を継続していくために、これらの課題の解決策を求めて活動を始めた。

今年の文化祭では、今までの活動に加えて、フェアトレードに挑戦した。「対等な関係の支援」の取り組みである。一方的に与えるのではなく、現地の人の自立を促す支援活動だ。今までの募金による支援は、支援者が貧困地域の人たちに資金を一方的に援助する形であった。これでは支援者に資金がなくなれば、支援が中断される可能性があり不安定だ。例えば、今年のように募金額が少なくなると、現地でも今までどおりの活動ができなくなる。

フェアトレードは、貧困地域の人々が作った商品を支援者が取り寄せる。それを販売して得た金額から必要経費や利益を受け取った上で、貧困地域の人へ材料費や労働対価を支払う。言葉どおり対等な取引である。したがって、収入に安定性がある。貧困地域の人は支援に頼るだけではなく、自立をすることができる。私たちは文化祭で、フィリピンのペレーズ島の人々がココナッツの殻で作ったストラップやお皿やスプーン、マニラのスラムに住むお母さんたちによる手作

りカードを販売した。フェアトレードにおいて、消費者の存在は大きなものであるため、フェアトレードについての周知を図るための展示も行った。

一方「新たな協力者の獲得」のために、地域の小学校のPTA会長さんをお願いして、新聞部の支援活動を紹介してもらい、支援をお願いした。文房具や衣類など多くの支援をいただいた。さらには、会長さんの配慮で、十一月十五日の小学校の友愛フェスタに厚狭高校新聞部のブースを設けていただき「私たちの支援しているペレーズ島」というテーマで展示、募金活動、フェアトレードを行う予定で、現在準備を進めている。

### おわりに

厚狭高校の文化祭に來られた方が「フェアトレード」の説明を読んで、商品を購入してくださいました。小学校の保護者からも文房具がたくさん届いた。新聞部の先輩が初任給をもらったからとたくさん募金をしてくださいました。今年もペレーズ島から感謝の気持ちを含めた子どもたちの手形と寄せ書きが届いた。ペレーズ島のダイケアセンター（就学施設）の先生や保護者からもお礼の手紙が届いた。

支援を通して、私たちの胸はいつも大きな喜びと感動で満たされている。私たちを支えてくださる多くの方がいる。そして、世界中に貧困や飢餓に苦しむ人々がたくさんいる。私たちはこのことを胸に刻んで、この支援活動をしっかり継続していきたい。